

左馬介の奥方さまのすけ おくがた（三田）

今からおおよそ四百年前のことです。三田のお城にいた殿さまは、山崎左馬介さまのすけといいました。左馬介には、天球院てんきゅういんという、美しくてたいそう力持ちの奥方がおりました。

天下をおさめていた豊臣秀吉とよとみひでよしが亡くなつた時、国じゅうの殿さまは、豊臣の家来のままにいるのか、徳川家康とくがわいえやすに味方するのか思案しました。

左馬介も考えました。

「どちらにもご恩おんがある。どうしたものか……。」

世の中は、風雲急をつけています。いよいよ、戦がおこるといいうわさが流れましたが、いつまでも、左馬介は考えているばかり……。

そんなある日、一通の手紙が、豊臣方から届きました。

「東国の徳川方がなにかたくらんでいる。大坂おおさかに集まり、たくらみを打ちくだきましよう。」

そして、こう続きがありました。

「ついでには、大坂も戦場になるかもしれません。みなさんの奥方をお城でお守りします。」

奥方を守るといふのは口実。奥方を人質にして徳川方に寝返らないようにするたくらみです。

これを読んだ左馬介は、あろうことか天球院に大坂城へ入るようすすめました。何かあれば、殺されてしまいます。

「何を考えているのです！」

天球院は、左馬介に詰め寄りました。

「考えちがいはなほだしい。豊臣方は寄せ集めの烏合うごうの衆。豊臣方につくと、この家も三田もほろびます。」

とうとう、左馬介に徳川方につく決心をさせました。

天球院は、兄が徳川家康の姫君と結婚したので、兄の味方をして、徳川方につこうと思っておりました。また、徳川家康の力を兄から聞いていましたし、徳川方につくことが家にもよいことだと思っていたのです。

天球院は、家を救うため知恵をしばらくしました。

まずは、大坂城下にある兄の屋敷に残された奥方と若君を救うのです。兄の奥方は徳川家康の末の姫です。手柄てがまになることは、言うまでもありません。

ところが、兄の屋敷のまわりは、びっしりと豊臣方の家来がかためて、うかつに出入りできません。

そこで天球院は、左馬介に知恵をさずけました。

左馬介は、見たこともない大きな車を家来たちに引かせて兄の屋敷に行き、警護の豊臣方にこう言いました。

「兄の奥方は、どうも重い病気でござる。大坂城でのくらしなど、もつてのほかにごさいます。温泉などにつき、景色のよいところでゆつくりなさるのが一番と、医者も言うております。」

さらに、いい考えがあると持ち出しました。

「こちらには、有馬の湯がございます。三田の城でしばらくおあずかりいたします。」

豊臣方の奉行は、左馬介の申し出にのることにした。

「その方の言うことももつともじゃ。ただし、奥方だけですぞ。」

奉行のことばを聞くやいなや、左馬介は、屋敷の大門に大きな車をつけました。

まずは奥方、それから、おつきの女たちをのせました。そして、なんと車のかけから、二人の若君までも乗せてしまいました。

外からは、中のような見えません。門の外で待っている豊臣方からは、何がおこっているのか、わかりません。

左馬介がしたがえた車は、奉行と家来の前をゆうゆうと

三田へと引きあげて行きました。

左馬介は、まんまと兄の奥方とふたりの若君を救い出すことに成功したのです。

天球院は、次に左馬介に徳川家康と兄に奥方と若君の無事を知らせる手紙を書くよう言いました。その手紙を読んだ家康と兄はたいそう喜び、左馬介の名は、家康にしっかりと覚えられました。

やがて、豊臣方と徳川方が東西にわかれた関ヶ原の戦いはじまり、予想どおり徳川方が勝ちました。負けた豊臣方にいた多くの大名が取りつぶしになりましたが、左馬介は大名に取り立てられました。

天球院は家を救うことができました。左馬介の奥方には、力だけでなく知恵もあつたのです。

こうして二人は、力をあわせて戦国の世を乗り切ったということです。

